

あつる

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

草ぶき小屋

明治四年、札幌の人口はようやく九百人を超すようになったが、その頃の札幌には野火が多く、家が類焼することも多かった。住民もすっかり火事慣れし、寒さや雨露をしのぐだけの手軽な草ぶきの小屋を建て、次の火事で燃えてしまつて、そこで暮らすという状況が続いていた。開拓使は草ぶきの掘立小屋をやめるように指導していたが、資金もないため住民は何度燃えても草ぶきの小屋に住むことをやめなかった。この草ぶき小屋の欠点は、火事に弱いこと。開拓使もその対策に苦慮していた。大通公園も、もとはといえば、南の民家街の火事が北の官庁のほうまで来ないようにつけられた防火ラインであった。

住宅建設資金

こんなことでは札幌のまちづくりが進まないと考えた岩村通俊は、住民に建築費を貸し付け、本格的な家屋を建ててもらおうという作戦に出た。貸付金額は百円（今の金額にして約百万円）。庶民にとっては魅力的な金額である。開拓使も無条件で貸したわけではない。対象は永住希望の世帯持ちだけ。しかし続々とやって来る貸し付け希望者。岩村は、これを見て喜んだ。

だが何箇月たつても、貸し付けを受けた者たちの本建築が始まらない。はなから本建築をする気などなく、遊ぶ金が欲しいだけ、という者たちがほとんど。他人の奥さんにお金を払って、妻と

して一緒に役所に出頭してもらい、百円を拝借するという者まで出てきた。中には同じ女性が昨日、今日と役所に顔を出すありさま。お役人も見て見ぬふりだったという。こうした詐欺まがいの行為で所帯持ちだけではなく、独身者もほとんど資金を借りた。その数、半年で二五〇件。

貸付決定がこのありさまだったので、工程の確認もほとんど行われず、完工検査の時には、検査対策のタミーの家まで登場する始末。一軒の家を「見せ家」と

北海道
歴史秘話
10

御用火事



草小屋を焼き払って模範を示す！」。役人は皆驚いた。

翌日、馬にまたがった岩村は、資生館の生徒や開拓使の役人、さらに消防組を引き連れ、まず開拓使の木材貯蔵所に火を付けた。

春である。火は乾燥した東の風におられ、西の原野に燃え広がった。のちに岩村は「而して

一家も失わず」と述べている。

いま、世の中はNHK大河ドラマの影響もあり、土佐の坂本龍馬ブームだ。北海道開拓に深い関わりのある土佐人といえば、明治四年（一八七一年）、わずか三十一歳で開拓使首席判官になった岩村通俊である。その岩村、札幌建設のため、常識では考えられないとんでもないことを実行していた。

し、検査場所へと移動して回ったという。

こうして金は借りたが、住んでいる家は相変わらずの掘立小屋。金儲けが目的の住民たちには、そんな仮寝の宿で十分だった。

放火

岩村は考えた。「草ぶき小屋をどうするか」。そして明治五年四月、札幌本庁の役人を招集。「住民が命令を聞かないのは、開拓使の建物自体に草小屋があるからだ。よって明日は、官の

の設置以前から札幌に住んでいた吉田茂八ほか三軒に過ぎなかったという。岩村の怒りが札幌を炎に染めたのだ。

黒田との対立

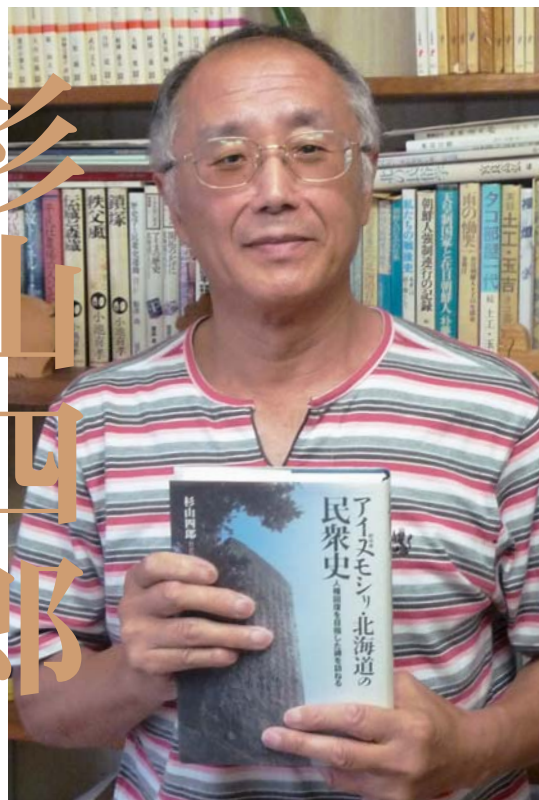
この岩村、前任の島義勇を追い出し、せっかく開拓使札幌本庁の首席判官になったのに、「御用火事」を強行した年の十月に開拓次官黒田清隆と衝突し、翌六年一月クビになって札幌を追われた。

原因は、こうだ。政府の財政が苦しいため、黒田は向こう十年間、開拓経費を一千万円に抑えるという厳しい予算制度を敷いた。その矢先、岩村が独断で予算外の土木工事に三万円を注ぎ込んだ。交通不便解消のためという説明であったが、これは「いちいちお前に許可など求めていられるか」という岩村の黒田に対する挑戦だった。

面目をつぶされた黒田は怒った。岩村と黒田は同年齢でもあり、お互いのライバル意識は相当のものだったろう。岩村は、札幌のことは自分一人で取り仕切ってきたという自負もあり、「謝る理由などない」と最後まで黒田と張り合った。

結局、薩摩に盾つきながら行った土佐人岩村のまちづくりも藩閥の壁を焼き払うことはできず、黒田清隆によって札幌から叩き出されたのである。

その後岩村は、政府に北海道開拓の重要性を説き、明治十九年、道庁設置に成功、初代北海道長官として、再び開拓の任に当たった。



杉山四郎さん

伝統文化を守る

歴史に興味を持ったのは、中学から高校にかけてでした。大学行って歴史を勉強し、紙すきをやるとか、彫刻をするとか、仏像を彫るとか、そついう日本の文化財を守る仕事をしたいと思いました。

芦別工業高校にいた時は獅子舞をやりました。他の先生や地域の人や高校生と、神社などで一生懸命頭を振ったんです。ワンサカ人が集まってきて、すごく楽しい思いをしました。

なんでそんなことをやったのかというと、文化を守りたかったからです。

民衆史

北海道の歴史を底辺で支えていたの

は、北海道の正史にはまず出てこない社会的弱者です。囚人・娼妓・タコ労働者や朝鮮人・中国人、もっと広く言えば漁民とか農民などの無名の人たちです。

そついう人たちに焦点を当てたら、北海道が見えてくるのではないかと思ひ、民衆史の研究を始めました。

空知の炭鉱の朝鮮人・中国人強制連行を調べていましたが、それだけではありませんでした。例えば、芦別市の野花南町にある発電所なども朝鮮人を連行して造っています。その他、道路・灌漑溝・水田などを造る時にはタコ労働者が使われています。そついうことを、三十代から四十代にかけて一所懸命調べました。

碑を調べる

朝鮮人や中国人が芦別や赤平・歌志内にいたといふことは、碑に書かれています。そついう人々の名前が書かれているか、碑は誰がいつどこに建てたのかなど、当然、調べに行くわけですね。

碑の調査をし始めて三十数年です。部分的に本にしていたのですが、二年半ほど前に、ここでもう一度見直して、まとめてみようと思ひ、全部書き直しました。

碑の表面に何と書いてあるか、そして右側面・左側面から裏面、台座には何と書いてあるか、そついう順番で見

ていきます。とにかく間違いたくないし、正確に記録したいので、妻の力を借りて何回も見直しながら調べていきます。

変化する碑文

戦前の碑は漢文が多くて読めないんです。漢文にしたのは、これだけ立派な碑なんだぞといふ権威づけもあるのでしょうね。難しい文章で書くわけです。だから漢和辞典と首っ引きで読まざるを得ません。今の人たちは、漢文で書かれては読めないですから。ですから碑に説明板を付けてほしいなあと思ひますね。建てた当時も、みんな「できた！できた！」と喜んだのはいいけれど、何と書いてあるのか読めない人が多かったに違いないと私は思っています。

戦後高度経済成長が始まったあたりから昭和四十年くらいになると、分かりやすい碑が多くなってきました。それだけ社会が変化したんですね。碑を見ていると時代背景が分かります。

松浦武四郎の碑には、武四郎が何年にここにきてそついう歌を詠んだ、など地域にあまり関係ないことを書いてあるものがあります。もっと地域に密着したことを書けばいいのに、対象の人物よりも自分たちを強調しているよつな碑が結構あるんです。

また、戦後全部廃止になったはずなのに、従何位だったとか男爵だった侯爵だったなどと、自分を強調している新しい時代にそぐわない碑もあります。

アイヌ民族の碑

アイヌ民族関係の碑は百を超えます。個人を顕彰した碑もずいぶんあります。そのほか、各自自治体の墓地には、自分たちの祖先をもつ一度見直したい、大事にしたいという思いで建てられた、無名の人のための慰霊碑もたくさんありますよ。

「アイヌモシリ」を書名に

我々シサム（和人）の祖先がこの島に來たとき、この島を勝手に蝦夷地、蝦夷地と呼んでいました。しかし、ここに先住していたアイヌ民族にいわせれば「我々の土地、アイヌモシリ」なのです。

僕は、この地が明治二年に北海道と命名されるまでは、この島の名前は「アイヌモシリ（人の住む土地）」だったと思ひています。蝦夷地といふ言い方を、僕はできれば使いたくない。明治以前のこの大地を「アイヌモシリ」と呼びたい。こつ思っています。だから書名にも「アイヌモシリ」を使ひました。「アイヌモシリ」から北海道へ、そついうことです。

杉山 四郎

すぎやま しゅう

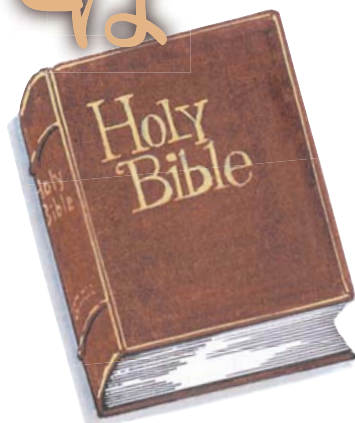
一九四七（昭和二二）年小樽市生まれ。北海道教育大学札幌分校を卒業後、高校の教師に。さらに苫小牧駒澤大学の非常勤講師として北海道地方史・アイヌ文化の二講座を担当。現在は右見沢市に在住。北海道文化財保護協会会員、札幌郷土を握る会通信会員。「私の民衆史」（正・続・続々）など、民衆史関係の本を多数出版している。

Dilettante 悠々人語録

5月に碑の調査歴30数年の集大成、『アイヌモシリ・北海道の民衆史—人権回復を目指した碑を訪ねる』を出版した杉山四郎さん。アイヌモシリ・北海道の歴史を底辺で支え開拓の礎となった民衆にスポットを当て、社会的弱者に目を向ける、そんな杉山さんの悠々人語録です。

あうる古今東西

文化譚

世界一の
ベストセラー
聖書とは

クリスチャンの方々に言われるまでもなく、世界一読まれている本が『聖書』であるのは事実であろう。では、この日本であなたのまわりに聖書をすべて読破したという人は、いったい何人いるだろう。最も名を知られていながら、信者の少ない日本では新旧二部からなるということさえ知られていないことも珍しくはない。聖書とはいったい、いかなる本なのだろう。

聖書は「新約」と「旧約」の二部から成り新約全二十七巻、旧約全三十九巻の大著である。この場合の「約」は「訳」ではない。約束の「約」、契約の「約」なのだ。人間と神との契約という意味を持つのである。

『旧約聖書』は神がこの世を造りユダヤ人を選び、予言を与えてきた物語である。いまひとつの『新約聖書』というのは、イエス・キリストの誕生に始まり、その生涯、死後の復活、弟子たちの布教などの話が綴られている。

世界一のベストセラーということでは、キリスト教徒が十億を数えるまでになったからで四世紀以来、欧米文化の基礎として発展してきたことによる。

ところが、ここに聖書を聖典とする宗教がもうひとつあるのだ。ユダヤ人が古代以来信奉してきたユダヤ教である。ただしここには決定的な違いがあつて、ユダヤ教はイエス・キリストを「救世主」として認めない。したがって新約聖書を聖書として認めないのである。ユダヤ教にとつての聖書とは旧約聖書だけなのである。

聖書については古来より膨大な研究がなされてきた。神学的な研究はもちろんのこと、近世に入ってから歴史学、考古学的見地からもその信憑性を裏付けるために多くの研究が続けられてきた。ただ、多くの歴史的実事が解明されたにもかかわらず、新約聖書でこれほど世界に影響を与えてきたイエス・キリストなる人物が、聖書以外の歴史的な文獻に恐ろしさともいえる。

一行も登場してこないのだ。イエスの処刑は、当時の社会世相から見れば取るに足らない事件だったのか、ローマ帝国やユダヤ人社会からは特筆すべき人物ではなかったのか、いまだに世界的な謎とされている。

ユダヤ教は古代の多神教世界の中では唯一姿かたちを現わさない全能の神を信奉した点で、初めての宗教だった。旧約聖書では、出現が予言されていたが、救世主はまだ現れてはいない。ユダヤ教にとっては民族の王国を建設してくれる救世主はイエス・キリストではないのだ。

新約聖書は、のちのキリスト教徒たちの熱心な布教で、飛躍的に広がった。かのローマ帝国が国教とするに及んで、ヨーロッパではゆるぎない基盤を築き、それとともに聖書も普及した。ただ、ユダヤ民族だけは旧約聖書のみをよりどころとしたために、歴史的な迫害を受け続けることになってしまった。書物の持つ力の恐ろしさともいえる。

BOOK INFORMATION

一冊 気になる 紹介 受書

「たった一度の ポールポジション」

一志治夫・著

講談社文庫
(講談社)

定価四六〇円
(税込)

一九八九年三月
発行



「新人類」の定義は昭和三十四年生まれから、四十五年生まれまでだ。そのことから、僕もそのはしくれた。僕達が二十代前半で、希望に満ちた八〇年代初頭に、忘れることの出来ないカーレーサーが大活躍していた。彼の名前は高橋徹。「たった一度のポールポジション」は彼の一生を綴った実話だ。広島県出身で一九六〇年十月生まれの彼は僕と同じ学年で、日本のレース界に彗星のごとく現れ、走っていた高橋徹のマシンがスピ

一九八二年頃には天才レーサーと呼ばれていた。ヘルメット越しに見える彼の目はどこか涼しげで、ガラツいた勝負の世界の人らしからぬルックスをしていた。当時の日本レース界の最高峰F2のデビュー戦で彼は中島悟の持つ鈴鹿サーキットのコースレコードを更新し、見事にポールポジションを獲得した。決勝レースは二着に終わったけれど、車雑誌も週刊誌も高橋徹の話題だらけになったものである。星野一義や中嶋悟に

真つ向勝負を挑む高橋徹が同学年であることを誇らしくさえ思ったものだ。当時高橋徹は間違い無く、新人類世代の光り輝く大スターだったのである。しかし、その特別に眩しいばかりの煌めきを放った高橋徹が突然人生の幕を引いてしまう。八三年の十月二十三日、G2Cシリーズの最終戦、富士スピードウェイの最終コーナー、三周目が終わる直前に二位を走っていた高橋徹のマシンがスピ



鉄道林

(旧国鉄北海道文学)



「鉄道林(旧国鉄北海道文学)」は重森直樹全国国鉄文学会会長の主唱によって北海道全域の国鉄文芸愛好者百人余りで「国鉄文学会北海道支部」が結成され、一九七三(昭和四十八)年に創刊号が発行された。発行島恒人、編集田中和夫だった。小説、散文、短文、評論など多彩なジャンルが詰まった文芸誌だった。

しかし一九八五年頃から本格化した国鉄改革・国鉄の分割・民営化は国鉄自身を解体して働く人々の人生を翻弄した。ある者は本意ではない本州への異動、ある者は不採用となり行き場を失った。二百人を越える自殺者を生む異常な事態のなかで国鉄の分割民営化が遂行され一九八七年四月一日JR会社が誕生した。誰もがその後の生き方を決断せざるを得ない大事件だった。

一九八六年九月には国鉄文学会が解散し北海道支部は北海道鉄道文学会に改称した。「国鉄北海道文学」も同年十二月発行の第二十一号限りで誌名を「鉄道林」に改題した。文学をめぐる情勢は大きく変わりJR中心の文学会活動は困難となった。そこでこれまでのベテランに加え、小説を書きたい良い作品をつくりたいと願う人は鉄道に関係なく同人になってもいいことになった。田中和夫の「文章教室」の生徒で有望な新人を紹介してもらい、全国の旧国鉄関係者からも人会希望が寄せられた。現在は四十代から八十代まで年齢も幅広く会員三十五名の健筆揃いである。

毎年四月、六月、発行月と年三回ほどの例会は昼食をはさんで作品の批評と交流など和気あいあいとした雰囲気である。

JR発足後、全国鉄道文学会が結成され、(株)交通新聞社と鉄道弘済会の共催で鉄道文学賞の発表を兼ねて全国大会が毎年JR各社の文学会持ち回りで開かれていた。昨年は札幌で第二十三回全国大会を開催した。

会として鉄道文化功労賞などを受賞することにも今日まで多くの同人が各種の賞をいただいている(氏名は割愛、詳細は鉄道林二〇〇三年四十三号に掲載)。

発行人である田中和夫は「国鉄北海道文学」に連載した小説「残響」で一九八二

年第十六回北海道新聞文学賞を受賞した作家である。今も続く「残響」の反響の大きさに驚くばかりである。同人誌としてこんな嬉しいことはない誇りでもある。(追記「残響」に魅せられて作詞作曲、プロ歌手が歌うまでの顛末を書いたエッセイが九月発行の「鉄道林」五十号に掲載)。

現在小説、随想、評論、短歌、俳句が主であるがどんな作品でも初めの一歩がある。最初は未熟でも意欲のある人は自分を磨き実力をつけ伸びていく。書きたいから書く、書きたいことを自由な精神で書くのが出発点「鉄道林」の良いところである。

(鉄道林 坂本順子)

江別文学



「江別文学」は一九七〇年(昭和四十五年)四月に藤倉徹夫ら二十代の青年四名から創刊された。彼等のスローガンは「文学に市民権を」。多分に左翼的であったと思うが、それなりに時代の背景があった。昭和三十五年の安保闘争から十年、いわゆる七十年安保の熱気が満ち全共闘や東大安田講堂事件のさなかであった。

文学に市民権をという意味は今だに明確ではない。

創刊当初の会員は藤倉氏を除き全て姿を消している。時代の流れというところか。もっとも戦後の同人雑誌の源流は「民主主義文学運動」にあり、どの同人誌もいくばくかはその流れに乗ったものである。反体制的な文学運動は今も脈々とその底流にある。またそうでなければ文学の意味がないと極言する人は多い。現在の江別文学は特別に主義主張はない。創刊時の「熱意」は風化された。昭和二十年代、三十年代の書き手はすでに老境に入り、四十年代もそうである。同人誌の主筆者や同人も同断であり、編集や作品に新鮮味が欠けてきている。江別文学もその例にもれない。

現在会員二十二名だが、平均年齢は言うには及ぶまい。崩壊の危機にあるが、各自歯をくいしばって頑張っているのが実情である。

来年二月に創刊四十周年記念号を発刊したいと編集委員会は考えているが、最近の他の同人雑誌の作品を拝見すると、人生の回顧や私小説的な作品が多く、後ろ向きな傾向が強いように思われる。日本全国、生活様式が画一化され、北海道、郷土独自の作品を希望しても無理なのかも知れない。

それを乗り越え、一段はね上げたところの作品を年齢にかかわらず生み出す努力が必要と考えている。

(江別文学 萩原英一)



■編集部から 小誌前号で紹介しました「札幌文学」が「第4回富士正晴全国同人雑誌賞」の特別賞を受賞。全国149点の中から審査され大賞に次ぐ賞で道内からの受賞は初めて。「札幌文学」編集人田中和夫さんらの呼びかけで立ち上げられた札幌地方同人雑誌懇話会が「札幌地方同人雑誌作品選集」を刊行しました。各同人雑誌の有力な作家から寄せられた11篇からなる作品集です。9月4日～9日紀伊國屋書店札幌本店で「札幌地方同人雑誌フェア」が開催されます。このような活動が道内の同人雑誌に活力を与えることを願っています。(K)

●発行・編集／中西出版あうる編集部
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34
TEL (011) 785-0737 FAX (011) 781-7516
URL: <http://owl-online.jp>
E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp

●発行責任者／林下英二
●発行日／2010年8月20日 ●デザイン／上野修一



ホームページへ
アクセス!